西浦田楽　参考歌詞

新井恒易『中世芸能の研究』(新読書社、1970年)より

庭ならし

ε やいやあ　あたらしき年のはじめい　年をとこ(男)　そら(空)みればんよふ　そら(空)みれば　そら(空)こそよけれじゃあ　とみふろ(富降)よとて　とみふろよとて　とみそまします　やら目出たやい

ε やいやあ　あたらしき年のはじめい　やいやあ　まづはなよね(花米)をまいらせる〈みな人をよかれ(良かれ)といやいや　いのり(祈り)ほどもう(申)さんよう　いのりほどもうさん　ふハい(祝)ほとする　やら目出たやい

ε やいやあ　あたらしき年のはじめい　やいやあ　年わか(若)水を我かくめ(汲)ばんよう　我かくめば　水もろともニまいらせて　やあとみ(富)ぞくまるるよう　といぞくまるる　とみぞ入ます　やら目出たあや

ε やいやあ　ひがし(東)山こまつ(小松)かきハけ(分け)　やいや　いづるつき(月)んよう　いつる月西ゑもやらぢとやあ　ここでてら(照)さんよう　ここれてら(照)さん　ここもてらする　やら目出たや

ε やいや(あ)はる(春)くればまつ我たね(若種)をまき(蒔)そめてんよう　まきそめて　しらわせ(白早稲)しらわせとや　をくわ(晩稲は)ほなか(穂長)ニ　をく中て(晩稲中稲)まさら　やら目出たあや

ε やいやあ　はるくさ(春草は)むずぶばかり　やいやあ　なれ(なり)ニけりんよう　なりニけり　いかニはるごま(春駒)の　やあ　うれしかるら(ん)　やら目出たあや

ε やいやあ　はる(春)山わ皆くわ(桑)じよろと　やいやあ　なりニけりんよう　なりニけり　いかニこはと(蚕ははと)のやあ　うれしかるら(ん)　やら目出たあや

ε やいやあ　つるかめ(鶴亀)のふみ(踏)ならしたる　やいやあ　ニわ(庭)なればんよう　にわ(庭)なればあくま(悪魔)はよせぢじ(寄せじ)やあ　とみ(富9ゾマしますようとみぞまします　とみぞふり(富ぞ降り)くる　やら目出たいや

ε やいやあ　にわ(庭)ならしだれ(誰)がのうべき　やいやあ　年をとこ(男)んよう　年をとこ(男)　年(々)まいるや(あ)年をとこ　みののじよぶん(美濃に上品)よう　みののじよぶん　みののしらきぬ(白絹)やら目出たあや

御子舞　歌詞なし

麦つき

ε あられことしわしんにやとらしどうしよよしなごのようがら。

ε あうれとうざはんにや、麦つけとのとのなごのよぶよりああれとうさぎはんにや。

ε ああれらずここめいれてむずめ(娘)よぶこゑは(声は)、まこのうち(幕の内)でのこと(琴)のこゑ。ちやうちいといいちちやらうら。

ε あられ麦ニ水はしりかけて、むけよふんにや、はうかまをきせてよたようがり。

ε あられ麦ひれふんにや、しいらけわ(精げば)もとゑよれ、ようがり〈。

ε あうれこよらさきはんにや、あうれしろかね(銀)ふんにや、ひいしやく(柄杓)にまげ(曲)て、またようかり。

ε あうれとうさぎはんにや、てんごんとの麦あらい(洗)とかいるせんごんく(千石)になるときやかひるかやうひやう。

田打ち

あらたあのしいらけの田のひかりけいるものをら

あら田をつくらばよき田をつくれ、かすた(門田)よりものをもや入りますとてやあをくだこをそよをけれ

ああら田をうつ（打）とてやあ、こをま（駒）うちできた、くら（鞍）もをてよせてやああめざずこをそはなをう
あら田ああをいる（荒田に生いる）ぢよをひくさのはなをう（富草の花を）てニつみ（手に摘み）いれいて宮えまいらばあよよ
きくわのニよきこをたね（蚕種）をひろめまよるまぢのままあひのきぬ（衣）をおり（織）はころも（羽衣）をよをせやあ
いいね（稲）のもとよりまあめ（豆）のちかなり、あすき（小豆）のさいなか（莢長）、あわのほなか（粟の穂長）、あいものどたりこをららず、もをとようをくゑみやればよとびうかあつかよをりめざずるをしはなよいとわらニきぬぬの（絹布）をニ、いいさけ（飯酒）ニちちくまぶしのたから（宝）物をづんたあけんぞく、ふねくるま（船車）ニつみ（積）いっててこん〈をんじくぢんのちからをあいそいて、こんの御所ゑまいるべし。
まいらせるつんどうらく、たいへいらく（太平楽）せうぢよまぢよをのごふくでん（御福田）よ。
みたよせんぢよまぢよのニぢさしやくをゑたよ、天日月のごふくで（御福田）よ。
こんやのこよい（今夜の今宵）ゆわハ（祝）れまします、正くわんをん（観音）とやくしニよらい（薬師如来）のごふくでん（御福田）よ。とうどちんじゅがらん（当堂鎮守伽藍）こをうのごぢんれい（御神霊）よ。ところのいちのみや（一の宮）と二の宮のごぢんれ（い）よ。やます（山住）はつだいのこんごどぢん（金剛童子）のごぢんれ（い）よ。かみほんげん（上本元）のこちんれ（い）よ。かまくらどの（鎌倉殿）てづくりよ。ところのまどころどの（の）てすくり（—政所殿の手作り）よ。正やのどぢとごやのどぢ（初夜の導師と後夜の導師）のてすくりよ。二人百姓とむらど（人民百姓諸人）のてすくりよ。ところたかあをんをんぼたたち（御坊達）のてすくりよ。
こんやのこやい（今夜の今宵）まいりとまいらせたまいたるわ、きせいぢよけん（貴賤上下）トちぢくなんと（僧俗男女）のてすくりよ。つんとをらあく、たゑいらあく（太平楽）。

水口

金でや三こ、さいはいとついしんに、うやまて申（勤請再拝と謹んで敬って申す）。そもよき年こふ（年号）、ひらきはしまりたまゑ、安政三年しやたい大年、ひのへ辰御年なり、月のならぶるかと（並びは）十二月、日かど（日数）三百五拾四日、そが中ニ今年此月、正月判日、ひとへはしまりたまへて、十日あまり十八日の御日、ともするもかのへ申お御日なり。神に神かと、仏のうめしんか、こくおもふて、天に白金の鼻さき、地にこかね（黄金）がふく立（つ）中にみ（実）がなり。ほぼのつはさをそうゑて（鳳凰は翔を揃えて）、神みみとからき、たいらをさむる。

こへヲもて正くわんのん（観音）、やくし（薬師）如来、とうどふちんしゅ（当堂鎮守）、白山ごんげん（権現）、山ノ御神、地蔵、十三仏のからん（伽藍）ごのまへにて、一にかきとりもとして、二人むろふ（人民諸人）、三にうぢこ（氏子）の御宝前ゑ、かず（数）のたから（宝）に、かずのつくゑにぜうのうちしき、とりととのゑてまいらあせ候程に，さをしか（小男鹿）の八つ（の）をんみみ（耳）ふり立申。

一、こかね（黄金）のをんまなこ（御眼）あんらんやかにみひらき、玉の御宝前をば、ききいれ（聞き入れ）、のふしゆたまゑて（納受し給ひて）よるのゆめ（夜の夢）を（ど）ときなく、ひる（昼）のさわぎなく、かね植にかたむきなく、かつらのゆめも、をたやか（穏）に御守（り）たまへハ、春くれは年かわり、水かわり、木のめ（芽）ささきかゑて、一ノ人のまくたね（種）、をろすたね、ね（根）のふかく、くき（茎）にふとく、はけハほふざん山ほふりゆうと（飯に炊けば蓬莱の山と）、できさせたまふなり。酒につくれはにちこんあぢあいと（取）させたまふなり。

春のさんめふ十六ぜんじよ、なつ（夏）のさんめふ十六ぜんしよ、合（せ）て三十二ぜんの皇神の御まへにて、二の糸かうかいこわ四たひのふせ□き（四度の起き臥し）なんなくくせなく（癖なく）つつがなく、かいとるほとの御ふく御りを□さつけ（—御福、御利生をうち授け）、御まもりたまへて、六月きよはぐさに、わたのじようぼん（綿の上品）まいらしょ。九月まつりに、いとのしよぼん（糸の上品）まいらしょ。

霜月ほんぢやう、あからかしらあや（綾）のをりさけ、にしき（錦）のみとぢやう（御戸帳）を、しんせるほどの、御ふく御しせふ（御福音利生打ち）さづけ、御ま（も）りたまへハ、十弐（の）きぬのそて（衣の袖）口そろゑてまい

り立（願）と（く）う下 四 のいさむ程 の御 ふく御 りしよ（御 福 御 利 生 打 ち）さづけ、御 守（り）たまへハ、たをクの人（遠 くの人 は）きいて（聞 いて）のうらやみ、ちか（近）くの人 ハ見 てのたのしみほとの、御 福 御 りしよヲ（御 利 生 を打 ち）さづけ、御 守（り）たまゑハ、鶯 のじはつこゑ（初 声）にまいらせふ。

東 方 光 くわん白 大 ほふ、西 方 にそハとうじよごふようふやう方 、いにしゑすんたんちよじや（長 者）たんからどう p ちやなや。あとをつかせたまへハ、いのち（命）のなかさ百 弐 十 年 一 たつのたつあしたの御 福 御 りじよ（御 利 生 打 ち）さづけ、御 守（り）すこせしめたまへハ、しけもりいこよほふし、中 とり取 て徳 ふしんで、うやまって申 なり。

高 足もどき 歌 詞 なし

鶴 の舞 歌 詞 なし

出 体 童 子 歌 詞 なし

鳥 追 い

ε これはたがとりをい。▹天 日 月 のとりをい。

ε きれはたが鳥 追 。▹こんやのこよいゆわハ（祝）れまします　正 くわんをん（聖 観 音）薬 師 如 来 、とうどちんがら（当 堂 鎮 守 伽 藍）ごうの鳥 をい。

ε これはたが鳥 追 。▹所 一 の宮 二 の宮 のとんりをい。

ε これはたが鳥 追 。▹山 住 初 だいこんごうどうじ（金 剛 童 子）のとんりおい。

ε これはたが鳥 追 。▹かふみ（神）ほんげんのとんりおい。

ε これはたが鳥 追 。▹かまくら（鎌 倉）どんのとんりおい。

ε これはたが鳥 追 。▹まどころ（政 所）どんのとんりおい。

ε これはたが鳥 追 。▹庄 やのとうじこうやのどうじ（初 夜 の導 師 、後 夜 の導 師）のとりおい。

ε これはたが鳥 追 。▹二 人 百 姓 むろうどん（人 民 百 姓 諸 人）のとりおい。

ε これはたが鳥 追 。所 のおんほ（御 坊）たちのとりおい。

ε これはたが鳥 追 。こんやのこよい、まいりとまへ（参）らせたまゑたるわ、きせしやうげちやくなんそ（貴 賤 上 下 、僧 俗 男 女）のとんりおい。

ε これはたが鳥 追 。いいなぞとよふなそ（稲 蔵 と米 蔵）のとんりおい。

ε よふなそ（米 蔵）ともうそよ、いいなぞう（稲 蔵）ヲもうそよ。おんまいがたにそうろわ、豆 のくさお（草 を）とるやら、あすき（小 豆）のくさをとるやら、おっとこ（男）みてのゑんめうら（えみ笑 い）、へんのこさす、あんやうつ〈にくいやく（あの奴 憎 い奴）、やうつ（奴）だにおい（追 う）たらば、のうもよいときかな。

ε ならまいとふきとさんた（定）めて、みんねヲはんしるそうしか（峯 を走 る小 男 鹿）、さわ（沢）をはしる子 うさき（兎）、やうつ〈にくいやつ、やうつたにおいたらば、のうもよいときかな。

ε ならまいときとさんだめて、ひろへくうニこんすずめ（拾 い食 ふ濃 雀 、さんばきぐらニこんがらす（小 烏）、やうつ〈にくいやつ、やうつたにをいたならば、のうもよいときかな。

ε ならまへときとさんだめて、おぶ神 と申 ハ、ねぶりカミと申 な。馬 のかたにそうろ（候）わ、ないらふうくやまい（病）と、うしのかたこそうろは、ひる長 やまい（病）と、やうつ〈にくいやつ、やうつたにおいたらば、のふもよいときかな。

ε ならまいときとさんだめて、是 より東 へおわば、やくしの上 ど（薬 師 の浄 土）より、あんのそら（空）へおいこせ。これはたが鳥 追 。南 へおわば、くわんのの上 ど（観 音 の浄 土）より、あんのそらへおいこせ。これはたが鳥 追 。北 へとおわば、しやかの上 ど（釈 迦 の浄 土）より、あんのそらへおいこせ。これはたが鳥 追 。中 へとをわば、天 じ

くてん（天 竺 天）より、あんのそらへおいこせ。これはたが鳥 追 。下 ゑちおわば、なへりうそこ（泥 犁 の底）より、あんのそらへおいこせ。
東 たもせん（千）両 よ、西 たもせん両 よ、合（わせて）四 万 やしやくありまんなヲなへしろだ（苗 代 田）とさんだめて、こゆわいわせん（御 祝 は千）年 よ。ひらやう〱。
【注 —▹の部 分 と末 段 は合 唱 したものと思 われる。】

早 乙 女（花 ささら／はんこいつき）

いせかほうりかはちしゆうのれんげか、ふくらすずめ（福 ら雀）のこがらさきをさしあげて、すきわすきわ。
松 のかんざり（飾 り）ます、聖 観 音 様 にます。当 堂 鎮 守 伽 藍こう愛 宕 様 にます。熊 野 の権 現 に末 社 へも、おしめのこうと諏 訪 大 明 神 。伊 豆 の権 現 にます。おうもにます。比 叡 山 のあやむら大 明 神 。しらはぎ大 天 小 天ごん（狗）。中 場 沢 にます、日 のみこあやむら大 明 神 。池 島 をしめのこう、十 五 社 様 に諏 訪 明 神 。上 鶯 に白 山 大 現 、熊 伏 天ごん、小 天ごん。かみやは白 山 をしめのこう。沼 元 池 の大 明 神 。伊 勢 の国 にます天 照 大 神 にます。ふしみ（伏 見）はお稲 荷 様 。奈 良 に七 社 の大 伽 藍 。西 国 にますます三 十 三 所 の観 音 。やはたに八 幡 大 菩 薩 。四 国 は金 比 羅 大 権 現 。
津 島 は牛 頭 天 大 。遠 江 にますます三 十 三 所 の観 音 。駿 河 の国 にますます富 士 は浅 間 大 菩 薩 。日 光 に東 照 権 現 と。
戸 隠 すたの権 現 へ。長 野 は諏 訪 の大 明 神 。峠 に愛 宕 の地 蔵 様 。草 木 ははむ天 王 。日 月 あやむら大 明 神 。時 原 に白 山 大 権 現 。あざぶの天 王 にます。山 住 み三 社 の権 現 へ。秋 葉 の観 音 にます。三 尺 坊 にます。神 原 の薬 師 にます。小 畑 の愛 宕 にます。古 屋 敷 にます吉 郎 別 当 、ゆうりん、びくにん。松 のかんざります。東 も三 十 三 カ国 。西 も三 十 三 カ国 。高 いは大 神 、低 いは小 神 。山 の御 神 ます。川 の御 神 ます。松 のかんざります。

しんたい

〈地 謡 〉
げニはをへたるまつがよの（げに名 を得 たる松 が枝 の）、をんきニむかしあらわかし（老 木 の昔 現 はして）、其 な（その名 ）をなのりたんまいや（—給 へや）。われわたかさずみのゆゑ（今 は何 をか包 むべき。これは高 砂 住 みの江 の）、かみここニあいをいて（相 生 の松 の精 ）、ふふとでん志 やとニたれしか（夫 婦 と現 じきたりたり）。ふ志 げやさてやなどころの（不 思 議 やさては名 所 の）、まつのきどくもあらわか志 （松 の奇 特 を現 して）、志 よもくこころなけねども（草 木 心 なけれども）、かしこきよ（代 ）とて、つちもきも（土 も木 も）、わかよきみ（我 が大 君 ）のくニ（国 ）なれば、いつ迄 かきみかよの（いつまでも君 が代 に）、ずみよ志 ニまづゆけば（住 吉 にまづ行 きて）、あれみたまつも志 やと（あれにて待 ち申 さんと）、ゆなみのうゑわなり（夕 波 の汀 なる）をいかせニまかれつつ（海 人 の小 舟 に打 ち乗 りて追 風 にまかせつつ）、をんきのかたいといんれニけり（沖 の方 に出 でにけりや、沖 の方 に出 でにけり）。

くらま

〈本 謡 〉
われ此 山 ニとしへ（年 経 ）たる大 天ごん（狗 ）とわわれがこをと。さればとゆうてかくそを（客 僧 ）わ、くもをとんでゆく（雲 をふんで飛 んでゆく）。またゆくくもを（立 つ雲 をふんで）とんでゆく。天 もんしゃ（顕 紋 紗 ）のしたたれ（直 垂 ）わ、つゆをむす（露 を結 ）んでかた（肩 ）ニかけ、しれゑのなんのきのた（白 柄 の長 刀 ）、し人 のあらまき（白 糸 の肚 巻 ）、たといわ（たとへば）天 まきぢ（天 魔 鬼 神 ）ニなりと、これでわいかニなさるからと。をんとも（供 ）の天こん（狗 ）わだれだと（ぞ）。つくし（筑 紫 ）ニわゆくさん（彦 山 ）のぐせんぼ（豊 前 坊 ）、たいせん（大 山 ）の

そをきほ（伯 耆 坊 ）、いすなのさむろうぶんじたる（飯 綱 の 三 郎 富 士 太 郎 ）、をうみね（大 峯 ）のぜんきか人 を（善 鬼 が一 党 ）、かつがせ（葛 城 ）たかまん（高 間 ）でも、よそまんでもあうるまんで（あるまじ）。

せんど（辺 土 ）ニおひ（い）てハ、ひら（比 良 ）、わよこふ（横 川 ）、とよふりがたけ（如 意 ヶ獄 ）、たつか（高 雄 ）山おのみんね（峯 に）すん（住 ）で、人 のめにこそ（人 のためには）あたご（愛 宕 ）山 、おあらし（嵐 ）、こあらしくも（木 枯 雲 ）ふとなてつうしんハ、くらんま（鞍 馬 ）の天 こん（狗 ）なおしわ（倒 しは）おびただしや。

のふ〈いでき、さだおふどの（沙 那 王 殿 ）。いで〈おがたり（語 ）して、きかせもふ（申 ）さん。むかし〈そふりよ（張 良 ）とゆうし（言 ひし）人 ハ、ひだりのくつ（沓 ）おおんとりて、みきりのくつおさしや（あ）げて。そふりよぐつ（張 良 沓 ）おさしやげくつ（捧 げつつ）、うま（馬 ）のゆゑ（上 ）なるせきこふべ（石 公 に）はかせ（履 せ）かるかやらやつさしのこふふろさし（はかせけるにぞ心 とけ）

そもそも、くしやくのうまれのみ（武 略 の誉 れの道 ）、べんけとんけひだいニも（源 平 藤 橘 四 家 にもとりわき）、かのうゑ（家 ）のみなかみ（水 上 ）わ、そうわ天 まひだいのひ上 をうけて（清 和 天 皇 の後 胤 として）、へうき（平 家 ）をうだん（討 たん）とをんぼしめす（思 召 ）かと、やらやさしのこころざし（志 ）を、いとま申 してたりかいれ（帰 れ）んば、うしわか（牛 若 ）たもと（袂 ）ニじんかりたまいげニ（にすがり給 へば）、なぐれうしや（名 残 惜 しや）と、さんかいしかい（西 海 四 海 ）のかぜん（合 戦 ）とゆうては（いふとも）、けみわはなず（影 身 を離 れず）なそれまむ（守 ）るべし（弓 矢 の力 を添 へ守 るべし）、たのめ（頼 ）よ（や）たのめと、みるかけくらんまい（夕 陰 鞍 馬 ）の、こしゆゑニかたてうしニけり。（梢 に翔 って失 せにけり）

猩 々

〈地 謡 〉

そもをんまい（前 ）ニ罷 （り）立 ゝ（立 ったる）男 をば、これいかなるものとやをぼしめし（めす）。

しょ上 （猩 々 ）のをんものがたりもうさんためニ、まかりた（つ）て候 が、かねぎんざん（金 山 ）のふも（麓 ）より、こうすいのいちごも（市 ことに）さけ（酒 ）をもあきない申 （し）候 が、あまりをや（親 ）ニここ（孝 ）で、な（名 ）をばこふうとか申 （し）候 。そそいそがれ候 。

〈本 謡 〉

しんぎよ（潯 陽 ）のゑ（江 ）のぼどろ（ほとり）ニて、かみのまいなるともまつも（菊 をたたへて夜 もすがら、月 の前 に友 待 つや）またかたぶくも（傾 ぶくる）さかすきもの（杯 の）、かげ（影 ）をたたいてまちいだし（―たたへて待 ちいたり）。きく（菊 ）をたたい（へ）てよ（夜 ）もすがら、しよ生 まい（猩 々 舞 ）をま（は）うよ。しよ上 まい（猩 々 舞 ）をま（は）うよ。あし（葦 ）のわ（葉 ）のふゑ（笛 ）をふうき（吹 き）、なみ（波 ）のつつみ（鼓 ）ちよんど（どうと）うち（声 澄 み渡 る浦 風 の、明 きの調 めや残 るらん。ありがたや）をんみ（御 身 ）こころすなこ（素 直 ）なるニよりて、此 つぼ（壺 ）ニいづみ（泉 ）をたたいて（たたへ）、さけうろんよ（たゞ今 返 し与 ふるなり。よも尽 きじ、万 代 までの竹 の葉 の酒 ）、くめどもつきせぬ（尽 きず）、のめどもかわらす（かはらぬ）あきのよ（秋 の夜 ）のさかすき（杯 ）。あきのよのさかづき。かうげわかたぶく（影 も傾 く）、いりゑにかいなし（入 江 に枯 れ立 つ）、あし（足 ）もとわよろろ、あしもとはよろろと、ようあるふしたるまくらのゆめの（酔 ひに臥 したる枕 の夢 の）さむろ（覚 むる）とをもゑば、いづみ（泉 ）は其 まま、つきせぬみよこそ（つきせぬ宿 こそ）目 出 たけり（けれ）。

弁 慶

〈本 謡 〉

そもさい（西 塔 の傍 に住 む）むさし坊 べんけい（武 蔵 坊 弁 慶 ）ニて候 。ごしくぢのしさい（われ宿 願 の仔 細 ）候 間 、五 條 の天 神 、ぎおん（祇 園 ）、きよ水 （清 水 ）ゑ参 らはやと存 （じ）候 。（五 條 の天 神 へ丑 の時 詣 でを仕 り候 ）。

こころやすなをニやすらゑはら（心 凄 げに休 らへば）、牛 若 たれおもなふりてみんと（牛 若 彼 をなぶって見 んと）いきちがい様 の（さまに）なきた（長 刀 ）のゑ本 （柄 元 ）をはっしとけやけ（―蹴 上 ぐれば）、すわしれ物 （しは痴 れ者 ）よ、物 みせんと、切 （斬 ）ってかかれば、牛 若 すこしもさわがず立 （突 つ立 ち）なおり、うすきぬ（薄 衣 ）ひ

きのけ、たあてまつるしんづとたちぬきもて（静々と太刀抜きはなって、つゝ支へたる長刀の、切先に太刀打ち合せ、つめつ開きつ戦ひしが、何としたりけん）、もっとゑ牛若よろずとみゑしか（手許に牛若寄るぞと見えしが）、たあたみかさねるうつ立の（たゝみ重ねて打つ太刀に）、さしけいしいさあるきおだけしたりけりやあ物々しやあれ程のこしやうひとりをさればとて（さしもの弁慶合はせかねて、橋桁を二三間、しさって肝を消したりける。あら物々しあれほどの〈、小姓一人を斬ればとて〉、手なりよいかニてもらすべしと（手並いかで洩らすべきと）、なぎのたゑなかくおっ取のべて（長刀柄長くおっ取りのべて、はっしとかかるちょど切は（走りかかってちゃくと斬れば）、そをむけうけていみげととびちがう（そむけて右に飛びちがふ）

おっ取なおしてすっそをはらゑば（取りなおして裾を薙ぎ払へば）、しうしゆにたたかう大なぎのたおん（ちゞに戦ふ大長刀）、おとされてちいからなし（打ち落されて力なく，組まんと寄れば切り払ふ、縋らんとする便りなし。せん方なくて弁慶は、季代なる少人かなとて、あきれはててぞ立ったりける。

不思議やおん身誰なれば、まだいとけなき姿にて，かほどけなげにましますぞ。委しく名のりおはしませ。今は何をか包むべき）、我はみな元よしとものおんこ（我は源牛若。義朝の御子か）。扨なんぢわ（汝は）。さいとうのむさし坊弁けいうたんなるわと（西塔の武蔵坊弁慶なりと）、たあかいになわのり合いけり（互いに名のりあい〈、降参申さんご免なれ、少人のおん事、我は出家、位も氏も健気さも，よき主なれば頼むなり。そこにや思召すらん、さりながら、これあた三世の機縁の初め，今より後は主従ぞと、契約堅く申しつつ〉、うすきかつかせたあてまあつる（薄衣被がせ奉り）、弁けい（慶）もなぎのた（長刀）打（ち）かつういで、くちよ（九条）の御所えとかゑりニけり（—御所へぞ参りける）。